

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 24 年度派遣報告書

—インドネシア共和国・ハサヌディン大学 インドネシア語 (H23. 7. 15 - H24. 9. 15)—

平成 24 年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 1 回生

廣瀬 崇幹

自身の研究テーマについて

貧困という言葉は先進国から定義を行ったものである。それゆえ、所得という目に見える結果で表現した定義でしかなく、地域に対して実際にどのような施策を行うべきかが明確にならない。統計データでは地方政府の財政や人口推移などの情報は把握できるものの、人々がなぜ貧困に陥っているのか、どのような点を改善することが必要か、といった情報について十分に得ることができない。そこで本研究では、フィールドワークにより人々の生活実態を明らかにすることで、貧困問題についてより理解を深める。貧困は世界中で普遍的な問題であるが、調査地としたインドネシア東ヌサ・トゥンガラ州も例外ではなく、絶えず生存の危機にさらされてきた。本研究では、東ヌサ・トゥンガラ州の中でも特にアクセスが悪く、統計上多くの人々が「貧困」と定義されているライジュア島を調査する。土がやせていて作物を育てることができない海辺に住む人々の世帯調査を行うことで、金銭所得だけではなくもの所有・時間の使い方・市場へのアクセスなどを聞き取る。本研究によって、統計情報や金銭のやり取りだけでは見ることのできない貧困の実態について解明することを目標とする。

研修語学の概要

インドネシア語はインドネシア共和国の国語であり、現在識字率は 90% に達している。1990 年代後半のスハルト政権下において「統一した言語」として、スマトラ地方のムラユ語をもとに作成された言語である。しかしながら 18,000 以上の島を持つインドネシアでは、昔からの民族や風習が色濃く残っているため、それぞれの地域では未だに 500 以上とも言われる地方語が存在している。

語学研修の内容について

派遣先であるハサヌディン大学では、京都大学の東南アジア研究所によって設立されたフィールドステーション内で個別指導を行っていただいた。講義は週 5 回、90 分間で、英語を用いて行われた。講義では英語で書かれたインドネシア語のテキストを用いて例文の暗唱・単語の使い方の勉強を行い、翌日までに演習として 10~20 個の英文をインドネシア語に訳すという宿題が課せられた。

文法を基礎として例文を繰り返し暗誦すること、またインドネシア語で自ら作文を行うことで、インドネシア語で物事を記述する能力が身についた。講義の時間帯以外には積極的に町に出向き、マカッサル市内の人々と積極的に日常会話を行うことでアウトプット能力を向上させた。その結果、講義では習わなかった間に挟む言葉や口語体のつなぎ言葉など、教科書だけでは学ぶことのできないインドネシア語も学ぶことができた。会話の言葉は繰り返し用いることによりスムーズに学ぶことができたが、背景

には日常的に積み重ねていた勉強があったことは言うまでもない。また、ハサヌディン大学ではカウンターパートの Amri 先生には学部のパーティー・会食などに連れて行っていただいた。自分の研究テーマや日本での生活の様子について、学生や教職員の方々とインドネシア語で会話を行うことにより、日常会話における感覚・コツをつかんでいくことができた。



写真 1：ハサヌディン大学での授業風景



写真 2：インドネシア語を教えていただいた Nur さん

研修期間中に印象に残った経験・体験

しかしながら、調査を行うにはインドネシア語だけでは不十分であることも痛感した。自身の調査地として予定している東ヌサ・トゥンガラ州ライジュア島には都会へのアクセスが非常に悪く、他の地域の人々と共通言語として用いるインドネシア語は日常的にほとんど使用しない。ライジュア島には2週間ほどホームステイで滞在させていただいたが、この際に地方言語として必要なサヴ語の単語も、インドネシア語と並行して教えていただいた。私が調査地として予定している海辺の漁村では市場へのアクセス手段を持つことができない人も多く、彼らにとって公用語であるインドネシア語は小学校で学んだ第二言語にすぎない。貧困問題について調査を行うことを計画している私にとってインドネシア語は架け橋でしかなく、地元言語となるサヴ語で会話を行うことが調査に求められるということを痛感した。



写真 3 (上)：ライジュア島に多く生えているヤシの木



写真 4 (右)：金銭獲得源として市場へ出される海藻

目標の達成度、及び反省点について

講義を受けた後に会話の練習を行うことによって、座学の語学能力と会話の語学能力を同時に身につけることができた。また東ヌサ・トゥンガラ州へ予備調査として出向いた際には、わずかながらではあったものの、地方言語を交えながら生活の様子を聞き取りすることもできた。しかしながら、本格的な調査を行う際にはインドネシア語、ないしサヴ語にて調査票を準備する必要もある。より正確なデータを得るためには一層インドネシア語・及びサヴ語のアウトプット・及びより正確な記述の練習を行う必要があると感じた。

報告者は本研修の後、東ヌサ・トゥンガラ州において博士予備論文に向けて長期調査を行う予定である。本プログラムによって基礎となるインドネシア語を学ぶ機会を得たことは大きい。本 ITP プログラムの事務局、ならびにインドネシアでサポートをしてくださった先生方にお礼申し上げたい。